



----- 発刊の辞 -----

火打石研究会は、次頁の「火打石研究の現状と展望」にあるような経緯で発足した。直接の契機となったのは、2000年頃に実施した、江戸東京博物館での火打道具作りの映像作成であった⁽¹⁾。その後、2001年5月19日に発足準会を江戸東京博物館で行い、これが第1回研究会となった。そして映像作成の調査成果を、日本考古学研究会総会で発表した⁽²⁾。以後、細々ではあるが、活動を続けてきた。活動は、参加者が各地で調査し、それをインターネット上で報告するという形を取ってきた。具体的には、小林が作成したホームページ「火打石研究会」に情報をよせていただく形を取り、年1、2回集まって総会、世話人会、見学会を「オフ会」として行った。実際には小林の怠慢や会員の忙しさもあり、遅々とした進行ではあった。ホームページを最初に立ち上げたのが、2001年であり、報告や関連する記事も多く蓄積された。2005年からはブログも立ち上げ、より簡単に情報を寄せられるようにした。しかしホームページは一度閉鎖してしまい、以前の文章は見られない物も存在する。また、ホームページでは一覧することが出来ず、引用文献としても使いづらい。

以上のような事を踏まえ、インターネット上の報告文を纏めて、火打石研究会の「ニュースレター」を発行することとなった。ニュースレターの発行自体は、2002年頃から議案にしていたのだが、小林の怠慢で今まで延びてしまった。ようやく今回発行することが出来た。今後は1年に1回、考古学協会総会を目途に発行していきたいと考えている。今回のニュースレターは、一応古い順に掲載し、短い情報については、次号に回させて頂いた。

また、掲載、投稿年月日は題名の下に () 書きで記載している。世話人の大西さんからは本ニュースレターのための書き下ろしの原稿を寄稿して頂いた。

本ニュースレターを手にとった方が、これを期に、入会頂き、日本全国の火打石の実体解明にご参加頂ける方が増えたら幸いである。報告は、ホームページに寄せて頂き、それをこうした形でニュースレターに載せていきたいと考えている。

また、ニュースレターの題名は付けるべきかどうかも含め、大分迷った。ホームページ立ち上げの頃、情報をお寄せ頂いたワインアドバイザーの西村氏から、フランスにある火打石ワインを紹介して頂き、第2回研究会の時、みんなで味わった。これがとてもおいしかった。そのワインの名前が、フランス語で火打石を意味する **silex** であった。これを当研究会のニュースレターの題名とさせて頂くことにした。

なお、入会はメール等で希望を伝えることにより成立する。会は、世話人会で運営し、世話人は、小林克 (代表)、北野隆亮 (副代表)、大西雅広、水野裕之、松崎亜砂子である。無理のない範囲で、息長くやっつけていこうというのが当会の方針である。

(世話人代表 小林 克)

註

- 1 小林克・松崎亜砂子・畑麗 2002『火打石道具の映像制作』映像記録調査報告 江戸東京博物館 *なお、この映像記録は江戸東京博物館映像ライブラリーで、見る事が出来る。
- 2 小林克・松崎亜砂子 2001「火打石研究の現状と今後」日本考古学協会第 67 回総会研究発表要旨

火打石研究の現状と展望

(2002.11.10 第27回日本民具学会大会発表レジュメより)

小林 克

1 はじめに

ここでいう火打石とは、発火具として打撃式発火に用いられた石のことである。日本では、木と木を擦る摩擦式発火方法と、硬い石と鉄などを打ち合わせて出る火花から火を起こす打撃式発火方法が存在したことが知られている。弥生時代には、摩擦式発火具が多く出土しており、古墳時代後期には、火打金や火打石の出土が確認されている。しかし原始・古代の発火具の実態は不明と断言できない研究状況である。

筆者は、1986年に東京都文京区の真砂遺跡の発掘調査を行ったが、その際火打石が多数出土した。当時は火打石に対する考古学者の認識が無く、出土した石が、前期旧石器ではないか、という意見を述べた者もいた。ここで筆者は、関連する文献、現地調査を行い、その結果を報告し、火打石の使用については、そのモデルを提唱した。

2 研究の現状

小林の調査により、江戸遺跡から出土する火打石は、主に茨城県山方町諸沢村やその近辺からもたらされた、白色で石英質の石が主体であることが判ってきている。先年、諸沢村で火打石を採掘する作業と、吉井本家の行う火打石の加工過程を記録化した。これにより、工程、道具、採掘方法などが具体的に明らかになった。一方、江戸遺跡から出土する火打石の分析では、接合事例の確認により、小林が提唱していた火打石使用モデルが検証された。また、江戸遺跡出土の火打石の中には、様々な石質のものが確認され、全国各地の火打石が江戸にもたらされた可能性が指摘された。他地域の研究では、名古屋地域の火打石については、水野裕之氏が取

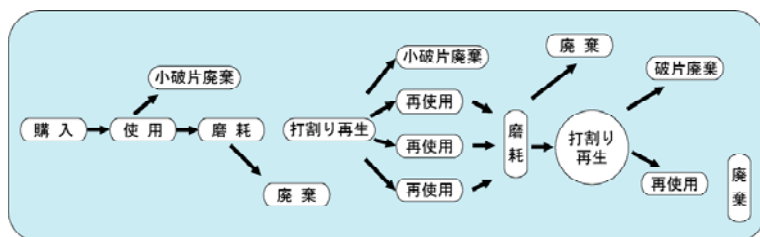
り組んでおり、養老溪谷のチャート等が使われたことが明らかになってきている。関西では北野隆亮氏らの研究により、鞍馬のチャート、二上山のサヌカイト、徳島の大田井のチャートなどが使われていたことが明らかにされている。これらの火打石は、北青山遺跡等、江戸遺跡からの出土が確認されている。しかしこれらはごく少数であり、全国各地の近世遺跡で、どのような火打石が出土するのか、ほとんど不明である。

3 研究の展望とお願い

日本各地の近世段階の火打石を、まず明らかにしていきたい。そのためには、どのような石が火打石として利用されていたのかを、明治期の物産書上等を利用して調査する必要がある。明治期にはまだ各地で火打石が掘り出されていたことがわかっているが、当時の実態は不明である。これを現地に赴き、聞き取り調査、文献調査、現地探査を行い、明らかにしていくことは、各地域の研究者の協力が無いと不可能である。各産地の火打石が明らかにされた上で、各地域の近世遺跡から出土する火打石を比定・分析することにより、その生産と流通の実態が明らかにされるであろう。更にその先には、中世の火打石、そして古代の火打石の実態を地域ごとに明らかにしていくことが可能となるのである。

こうした研究目標を掲げて火打石研究会を設立し、活動を開始している。筆者も具体的に個別調査を開始してはいるが、ぜひ全国各地で、調査をお願いしたい。

(一部筆者改変)



火打石使用のモデル



出土した3点の火打石が接合

新潟県長岡市蓬平において第一回火打ち石調査実施

(2002年ホームページ掲載)

小林 克

1 はじめに

明治期の博覧会記録に、全国各地の火打ち石の産出地が記載されていることが、判明しています。ここに記載されている火打ち石産地は、江戸時代から続いていると考えられます。従ってこうした産出地を現地調査し、その火打ち石を明らかにすることは、江戸時代における日本各地の火打ち石の実体を明らかにしていくことに繋がります。

以上のような考えで、日本各地の火打ち石産出地の調査を提唱していますが、私もその一例として、現在の新潟県長岡市蓬平に調査に行って来ました。蓬平には「明治十年内国勸業博覧会出品解説『明治前期産業発達資料第七集』に、「越後の国古志郡蓬平村字萱場」から火打ち石を田中中三郎氏が掘り出したと有り、それを調査したわけです。なお、この文献については、大西雅弘氏が「上州吉井の火打金と火打ち石」(『考古学ジャーナル』417号 1997) 紹介しています。残念ながら今回の調査では十分な成果は得られませんでした。今後機会を見つけて継続して調査を行うつもりです。以下はその調査概要報告です。

2 調査概要

蓬平は、新潟県長岡市の南東部の山間部にある集落で、「蓬平温泉」として有名である。私の母が何回か宿泊したことのある温泉旅館福引き屋に日帰り入浴することとし、2001年8月17日に訪問した。母や家族は



採集した石

入浴し、私は宿の女将に事情を話して、萱場の事を尋ねた。そうしたところ、福引き屋で働く大勝三郎氏(大11年生)を紹介してもらい、萱場の位置と性格について聞くと、実際に同行して萱場を案内してくれることとなった。私のワンボックスカーで、蓬平温泉郷のある谷

間から、S字に曲がりくねった道をどんどんと栃尾市方向へと山道を登っていった。市境には萱峠展望台があるが、そこに行く途中で南に折れる道を進み、やや開けた高原状の一体が所謂「萱場」であった。以下は、大勝三郎氏から教えていただいた話である。

{萱場とは、字名で正式には「萱場耕地」と呼んでいた。結構広い範囲を指していて、その山の下の方には「本村」、「屋敷」などの小字名を持つ場所があった。昔は「屋敷」には人が住んで



大勝さんと現地を訪問

いたが、イケダニの方に疎開した。「石山」といった地名の場所が「屋敷」の下の方にあつて、そこには火打ち石がゴロゴロしていた。

(田中忠治郎の) 田中という苗字は、おそらく「よもやま館」に関係する人で、名主で苗字・帯刀を許されていた人だと思う。(三郎氏は) 子供の頃、ヨシカングラのあたりで小さい火打ち石を拾った(ヨシカングラとは現在の町営プールの谷の下から見て斜め右のこんもりした部分)。ここでは白っぽい石を拾って火打ち石とした。子供の頃や戦後すぐに



ヨシカングラ

は火打ち石と火打金を持ち、火口を手に持ち、そのままキセルに火を付ける大人が結構いた。このあたりの人は白い石を火打ち石として使っていた。}

写真は、ヨシカングラ下の集落中にある三郎氏宅の畑で白い石を拾った。三郎氏によれ

ば、こうした石が以前拾った火打ち石と同じで、昔はヨシカングラのあたりでもこうした感じの石が落ちていたのだという。この石には部分的に石英質の部分があった。

以上の調査から推察されることは以下のようである。おそらく萱場の下の方のどこか、「石山」の可能性が高いが、で明治前期には火打ち石を掘り出したのであろう。萱場で拾える石や斜面に露出している石は多孔質火成岩で火打ち石には適さない。集落の近くで一点拾った石は以前から有る火打ち石と同じだという。この石は、石英質であり、よって近くに石英の鉱脈があり、それを掘り出したのではないか。

3 今後の課題

第一回の調査は不十分ではあったが、一応

蓬平地区でどのような火打ち石があり、どの場所から掘り出したのか、予想が立てられた。今後は雪解け後に現地での確認調査を行うとともに、田中中三郎氏の関係者を突き止めさらなる聞き取り調査を行得たらと希望している。また蓬平に残る民具の調査も行えたらいいと思う。

このような調査の後、本地域の火打ち石の実体が明らかにされたなら、その後このような石が長岡市内をはじめとした新潟県内の遺跡出土事例を確かめていけたらと希望している。また、次回調査を行ったら報告します。

今回の調査で箸は、蓬莱館福引屋さん、大勝三郎さんには大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

星野村十龍字露原山の火打ち石

(2002年5月19日 ホームページ掲載)

山下実



星野村位置図

5月18日星野村十龍字露原山の火打ち石の産地を確認しに友人の佐藤勇次氏と星野村に行き役場で確認をと

思い、電話するも休みとのこと、村の図書館で調べても十龍は判るが字露原山がどこなのか不明で近くのお店に聞いて回るが判らない。しかし十龍地区のすぐ横を流れる星野川に下りると大きさは1メートルから拳大の白メノウが多数落

ちている、字が露原山となっているので十龍の高くなっている所を探してみようと池の山キャンプ場に行ってみると駐車場のすぐよこに3メータ

程の白メノウの原石がありその回りを探してみると花壇の縁石や点在する石が白メノウでこの石を割り、剥片で金切鋸の背を叩いて見ると確かにハッキリとした火花が飛び火打ち石の役目をする事がわかりもっと上のお茶文化館の上に行ってみると一抱え程の白メノウ原石が5、6個あり周りを探すとそこかしこに有る事がわかり資料として幾つか採集を行い帰ってきました。しかし字露原山の場所は確認できず後日村の教育委員会に確認する必要があります。又確認した白メノウが当時採掘販売されていた物かの確認もひとつようだと考えています。

気付いた点はこの白メノウがこの地域八女郡内では石器として石鏃やスクレイパー、



ドリル等に使用されている事です。

白メノウ原石

青梅市内の火打石調査

(2004. 00. 00 ホームページ掲載)

小林 克

平成15年12月30日、かねてよりの課題であった、東京都青梅市内の火打石産出地の調査に行ってきた。

1 経緯

火打石研究会では、以前より明治期の『内国勸業博覧会出品目録』等に掲載されている全国の火打石産出地の調査を大きな課題としてきた。そうした中で、小林は現在の青梅市内に比定される「多摩郡黒澤村瀧の澤」、「同二俣尾村平鉾山」についての調査を行いたいと、研究会で言明していた。

平成15年の前半に、大西会員から、「青梅市教育委員会に問い合わせたところ、既に調査を行っており、報告書も作成中らしい。」という情報を得た。その為、平成15年9月頃、青梅市郷土博物館に問い合わせたところ、学芸員の木下裕雄氏から「火打ち石の産地」（青梅市文化財ニュース第188号 平成15年6月15日）を送付していただき、筆者である、角田清美氏の連絡先を教えていただいた。角田氏は、都立北多摩高校の地学の先生で、青梅市文化財審議員でもあり、既に二俣尾地域で産出地の調査を行っていた。

当初は、10月の前半には連絡するつもりであったが、小林は仕事が多忙を極め、なかなか連絡する時間も取れなかった。なんとか、12月の後半に角田氏に連絡したところ、平成15年12月30日に現地を案内していただけることとなった。

2 現地調査

12月30日10時に、JR 奥多摩線の二俣尾駅に、角田氏、同僚の先生、木下氏と小林の四人が集合し、車二台で出発した。角田氏が「二俣尾村平鉾山」に比定されている地点は、二俣尾5地内の尾根上にある巨大なチャートの岩塊であった。

車で青梅街道を北上し、JR の軍畑駅の手前を、平溝川に沿って北上し、高水山の登山道の手前で車を止めた。登山道を少し登った

所から、東に逸れ、小さな沢を、砂防ダムを越えて登っていく。その小さな沢の東側に、高水山方面から、北西から南東に延びる尾根の頂きに、そのチャートの巨岩があった。角田氏の実測によれば、「全長約20m、幅約12m、高さ（比高）約20m」（前述文献



二又尾村平鉾山と比定される山

「火打ち石の産地」より）程の巨大さであった。この巨大なチャート、通称「硯石」の上に、小さな（と言っても私の何倍もある）「墨石」が乗っていて、巨石の北側は、尾根の土部分とは深さ1m上の堀で分けられていた。角田氏の後ろを付いて、巨石の周りを一回りしたが、その下部にはおびただしい数の石片が累々と積み重なっており、自然に剥落した状況とは見えなかった。散乱している石は、チャートで、大きさは様々であったが、拳大よりも大きいものが多く、質の悪い物が多かった。地表面の観察では、石を剥ぎ取る道具などの人工遺物は確認できなかったが、自然な剥落状況とは明らかに異なり、この地点でチャートを剥ぎ取っていた可能性が高いと思われた。

この場からチャート片を幾つか持ち帰ったが、多くは不透明の灰色を呈し、黒色の筋や部分があり、逆に白色に近い灰色を呈する部分もある。また剥片によっては、不透明な白色に近い灰色を呈するものもある。

持ち帰ったチャート片と吉井本家の火打金を打ち合わせたところ、山方町産火打石と同程度の火花が出現した。ただ、打ち合わせる際、二俣尾の火打石の方が、微妙に硬質な感覚が、手に残った。

角田氏は前述の文献以外にも、この巨大チャートに関する報告を作成されており、今

年度中には青梅市教育委員会の出版物に掲載されるとのことであった。現地調査では、その報告文「須崎沢流域の地学的環境」を、当日のテキストとして配っていただいた。本文の内容は、当日の見聞や角田氏からの話と、同報告文からの引用である。

今回登っていった沢については、名称が無く、沢の下に住む4戸の家が全て「須崎」姓であることから、「須崎沢」と角田氏が称している。また巨石の下部の急斜面の一部が、若干平坦化した部分には、角田氏の聞き取りによれば、幕末くらいまで家があり、人が住んでいたという。そして火打石をかますに入れて出荷していたという。



巨大な火打石・チャート原石の上部



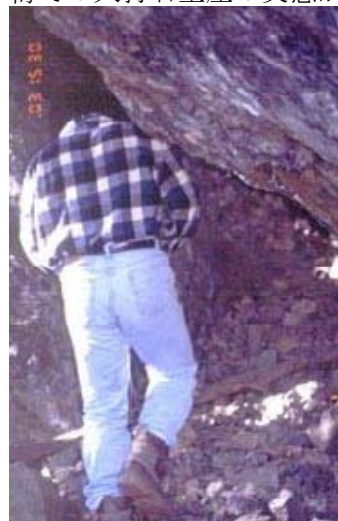
巨大原石の下に散乱する火打石

4 まとめ

今回角田氏にご案内していただいた巨石の場所自体が、『内国勸業博覧会出品目録』に

ある「同二俣尾村平鉦山」に、直接比定する事の妥当性は、当時の文献記録も見つかっておらず、まだ少し弱い感もある。しかし今回の地点で、チャートを、火打石として剥離していた事は、ほぼ間違いない。また「須崎沢」全体に多くのチャートが散在していることから、「須崎沢」で火打石を掘り出していた可能性は、ほぼ間違いないと思われる。

今後は、関係者の子孫の方々を探し出して、聞き取りを複数記録する事が出来ればいいし、更には江戸後期から明治初期頃の関連文献を探し出すことにより、より具体的に、青梅での火打石生産の実態が明らかにされるで



巨大原石の下で

あろう。また、それと平行して、他に露頭や掘り出しの採掘鉦がないか、現地調査と現地での聞き取りを行う必要が有ろう。『内国勸業博覧会出品目録』に見える「多摩郡黒澤村瀧の澤」も、おそらく近くに存在していたと思われるからである。

今回は、角田氏のご協力により、実際の現地を見学することが出来、また各種の情報を御教示していただいた。また青梅市教育委員会の木下氏にも同行していただき、資料を提供して頂いた。お二人のご協力に、この場を借りて、あつく謝意を表す次第である。

参考文献

角田清美 2004「須崎沢流域の地学的環境」青梅市教育委員会

韓国における火打石についての二三の覚書

(2002. 05. 25 第2回火打石研究会報告)

北野 隆亮

1 はじめに

火打石（火花式発火具）について、日本国にもたらされた経路を考えた場合、隣国の韓国、あるいは中国大陆での実態を知ることが不可欠なことであると思われる。

近年、韓国の火打道具が 2001 年に北海道立近代美術館において開催された「朝鮮王朝の美」展で展示された。また、2001 年に訪問した済州島・済州大学校博物館でも収蔵庫の所蔵資料中にあることを確認し、これについては実際に観察する機会を得た。

ここでは、以上 2 例の韓国の火打道具について紹介し、韓国における火花式発火具を理解する為の一助としたい。

2 韓国における火打道具例について

(1) 「朝鮮王朝の美」展出典例

「朝鮮王朝の美」展に出展されたものは大韓民国ソウルの国立民俗博物館所蔵資料で、当展示会に貸し出されたものであった。過去、何度かソウルの国立民俗博物館を訪れているが、これらの資料は展示されていなかったことから収蔵資料と思われる。図録掲載の資料は革真鍮燧袋 1 点、綿刺子燧袋 1 点、鉄製火打金 1 点、火打石 2 点である。火打石の石材は石英とされ、火打金は鋼鉄製と銅製のものがあるとされる⁽¹⁾。

(2) 済州島・済州大学校博物館所蔵資料

済州大学校博物館の所蔵資料には火打金 5 点（山形 2 点、短冊形 3 点）、火打石 1 点、火打袋 1 点、付け木 1 点（竹筒に入れていたもの。木材は榎で断面形 8 角形の長さ 5 cm 程の棒状、1 辺は焼けて炭化面となる。）である⁽²⁾。

火打石は、おおむね長さ 5 cm、幅 2.5 cm、厚さ 1.5 cm の大きさを測り、石材は不明ながら、光沢のある黒い石である。一部白色の風化面をもつものであり、大剥離面 1、小剥離面 1 を観察することができ、拳大の礫を 3? 4 個に分割して火打石としたものと考えられ

た。済州島内には産しない石であるとのことであった。

3 『林園経済志』にみる火打道具

済州島・済州大学校博物館で火打道具実見の便宜を図っていただいた高光敏先生に火打道具に関する近代の文献資料を教えていただいた。

『農林水産古文献備要』に採録された『林園経済志』⁽³⁾に火打道具に関する記載がみられる。漢文で書かれたその文献によると、「取火引火諸器」の項に「火鎌」、「火石」、「火撚」があり、それぞれ火打金、火打石、火口に対応するものである。

火打石に関しての記述について、黄色、青色、白色のものがあること、金剛山麓産のものは黒色の石であり、水晶のように透明感があるもので大量に採掘されたことなどが記されていた。このことから、済州島で見た光沢のある黒い火打石は金剛山麓産のもの可能性を検討する必要がある。

なお、興味深いこととして、現在の火打道具の呼び方が『林園経済志』のそれと異なることである。高光敏先生によると、現在では火打金、火打石、火口のことを、それぞれ「火鉄」、「火種石」、「火付」と呼ぶそうである。

4 おわりに

以上、韓国の火打道具について二三の事例を紹介した。火打道具の系譜を考える上で隣国・韓国での実態を知ることが不可欠なことと考えられることから、僅かな知見ではあるが扱ってみた。

註

1 図録『朝鮮王朝の美』北海道立近代美術館、北海道新聞社 2001 年

2 資料実見に際し、済州大学校博物館高光敏先生に便宜を図っていただいた。

3 『林園経済志』（『農林水産古文献備要』金榮鎮、韓国農林経済研究院、1982 年）

イーハトーヴォの火打石

(2006. 02 寄稿)

大西雅広

数年前、地図ソフトで火打地名を検索していると、「燧堀山」(かどほりやま)という「そのままやがな!」と言える地名が目にとまった。早速地図を表示してみると岩手県であった。岩手県の火打石産出地として「南岩手郡鵜飼村」の名は第2回内国勸業博覧会出品目録⁽¹⁾に掲載されている。果たしてここなのだろうか。「鵜飼村」というだけでは場所の特定は困難である。しかも遠い! 気になりながらも月日は経ってしまった。

その後、東京大学コレクションXIの『和田鉦物標本』⁽²⁾という書物を眺めていると、明治8年と9年の『各府懸金石試験記』という項目が目にとまった。刊行年と書名に惹か

れてじっくり見ると、そこには複数の火打石産地が書かれており、その中に「岩手県 陸中国岩手郡鵜飼村字鬼越山産 燧石」とあった。念のために原本を確認しても文字に間違いはない。久しぶりに地図で「燧堀山」を見ると指呼の位置に鬼古里山と鬼越という地名がある。数年ぶりに場所が特定できた瞬間である。

周辺を見ると盗人森、筏森、狼森という変わった地名もある。どこかで聞いたような? これらの地名は、宮沢賢治の『狼森と筏森、盗人森』という童話の題名と同じだった。しかも、この童話の中に「東の稜(かど)ばった燧石の山を越えて」という箇所⁽³⁾がある。先の燧堀山は、これらの地名の東に位置する

ことから、ここが火打石産出地であったことは間違いない。なぜなら、中学時代、宮沢賢治は「石ッ子賢さん」と呼ばれるほど石に興味を持っていて、この地をくまなく歩いてきたからだ。

昨年、盛岡市に出かける機会があり、かねてから気になっていた燧堀山へ足を伸ばした。時期が6月と遅かったせいで山は緑に覆われ、採掘場所を確認することはできなかった。しかし、やや赤味を帯びた良質の玉随が至る所で確認でき、厚みが20cmを越える大型礫も存在することから、採掘は可能と思われる。品質の高さは茨城県諸沢産と同等であろう。単独での踏査は危険を伴うし、採掘坑の確認は時期を改めて行うことにして下山。

ここまでくれば後は文献史料での確認が必要。図書館の郷土資料室に行き、江戸後期から明治初期の物産取り調べ書類や地誌類を探す。明治十二年発行『巖手懸管轄地誌』の陸中岩手郡鵜飼村、鉦山の項に「燧石産 村ノ中部ノ西 鬼越山ニアリ、明治七年十一月二十二日許可、借區六百五拾零坪一ケ年 出来高凡貳千五百貫目」あった。ここでは「鬼越山」とのみ記されている。現在の「鬼古里山」は燧堀山の隣に位置するが、山を見ると岩がごつごつしたところが見受けられず、周囲にも火打に適した石は落ちていない。同書の字地、鬼越の項には「山三所」とあり、字鬼越の山という意味なのであろう。

滝沢村誌⁽⁵⁾は、『鵜飼野史』を引用して「燧石 鵜飼鬼越山 燧堀山(かどほりやま)は全山石英より成り立っていれども、…中略…鵜飼の村の人等によって坑を穿たれ、深く其の中に入り…以下略」と記している。また、また、おそらく伝聞であろうが、この火打石は盛岡付近のみでなく、盛岡新山河岸から江戸にまで移出されたとも記していた。訪れた図書館は『鵜飼野史』を蔵書しておらず、記載内容の確認は行えなかったが、時間の関係もあり、宮沢賢治と石に関連する書物の背表紙をざっと眺め、燧堀山に関する岩手での

燧堀山周辺地形図

(1/2.5万地形図「姥屋敷」「小岩井農場」)

れてじっくり見ると、そこには複数の火打石産地が書かれており、その中に「岩手県 陸中国岩手郡鵜飼村字鬼越山産 燧石」とあった。念のために原本を確認しても文字に間違いはない。久しぶりに地図で「燧堀山」を見ると指呼の位置に鬼古里山と鬼越という地名がある。数年ぶりに場所が特定できた瞬間である。

周辺を見ると盗人森、筏森、狼森という変わった地名もある。どこかで聞いたような? これらの地名は、宮沢賢治の『狼森と筏森、盗人森』という童話の題名と同じだった。しかも、この童話の中に「東の稜(かど)ばった燧石の山を越えて」という箇所⁽³⁾がある。先の燧堀山は、これらの地名の東に位置する

調査を打ち切った。

群馬に戻り、気になっていた『宮沢賢治 宝石の図誌』⁽⁶⁾ という本をじっくり見ていると、燧堀山の採掘坑を訪ねた記述があった。この本の記述からすると、採掘坑は6月に登った場所とは反対側の斜面に存在するようだ。この本に辿り着くのが遅かった！賢治の



燧堀山全景

註

- 1 『第壹區 第二回内國勸業博覽會出品目録』内國勸業博覽會事務局 1881 (明治14年)
- 2 田賀井篤平 編『東京大学コレクションXI 和田鉦物標本』東京大学総合研究博物館 2001
- 3 宮沢賢治「狼森と筏森、盗人森」『校本 宮沢賢治全集 第十一巻』筑摩書房 1974
- 4 巖手懸「巖手懸管轄地誌第一號之二十四」1879 (明治12年) 『岩手県管轄地誌』第1巻 岩手郡 (一) 齊藤勝巳 2003 を使用
- 5 福田武雄 『農民生活変遷中心の滝沢村誌』滝沢村 1974

童話にあった「燧石の山」というのは「燧堀山」であったに違いない。鶉飼村の火打石はイーハトーヴォの火打石だったのだ。

その後の調べで、鶉飼村における明治期の火打石採掘規模は、1ヵ所で営業人員2人、借区坪数650坪、税金650厘であったことが判明した⁽⁷⁾。いずれ機会があれば条件のよい時期に再度現地を訪れたい。また、燧堀山産火打石の供給先も今後の課題である。



確認された玉随

現在の地図では「かとほりやま」と振り仮名を振っているが、古い書物では「かどほりやま」とにごった振り仮名を振っている。本来は「かどいし」が採れる山という意味だったのであろう。

- 6 板谷栄城『宮沢賢治 宝石の図誌』平凡社 1994
- 7 巖手縣庶務課編輯係『明治十四 巖手縣統計表』巖手縣 1883 (明治16年) 本書の税金額単位は、文字が小さく不明瞭であるが、文字の形と千の単位で罫線が引かれていることから厘と考えた。

国土地理院発行2万5千分の1地形図「姥屋敷」「小岩井農場」を使用

火打関係史料拾遺 (1)

(2006. 02 寄稿)

明治前期鉦物誌類

大西雅広

1 はじめに

火打具に関する文献や絵画資料については、畑麗、松崎亜砂子の両氏によって集成⁽¹⁾され、その結果は資料集的な使い方が可能なほどにまとまったものとなっている。しかし、日常生活と密接に関わる火打具の史料は断片的なものが散在しており、その集成には多くの時間と労力が必要である。そのため、今後も史料の探索を継続的に行い、集成結果をより完全なものに近づけてゆく必要がある。

る。

今回紹介するのは、明治前期に刊行された鉦物誌類である。『各府県金石試験記』は、明治7年と8年に文部省が行った日本産鉦物の調査結果を刊行したもので、収集、調査されたのは鉦山の有用鉦物に限られている。この書は2001年に刊行された『東京大学コレクションXI 和田鉦物標本』⁽²⁾にその内容が掲載されている。本書には他にも『本邦金石畧誌』、『博物館列品目録』が覆刻に近い形で

収められている。以下、この図録を参考に火打石に関係する部分を紹介し、今後の火打石研究の一助となることを願う。

2 火打石産出地

1. 『各府県金石試験記』明治八年分⁽³⁾

○熊谷県

武蔵国比企郡青山村字大原入産 燧石

○茨城県 常陸国久慈郡諸沢村北富田村字三ヶ草山産 燧石

同所増鉄山産 燧石

※以下は「燧石」ではないが参考に記しておく。

○新川県

越中国礪波郡⁽⁴⁾ 荒木村並吉江新村領字坂尻産 瑪瑙石

越中国礪波郡大西村字是ヶ谷産 瑪瑙石

2. 『各府県金石試験記』明治九年⁽⁵⁾

○岩手県

陸中国岩手郡鶉飼村字鬼越山産

※下記は火打地名のため、参考に記しておく。

○石川県

能登国羽咋郡火打谷村字彩色谷産

硬満俺鉦

3. 『本邦金石畧誌』⁽⁶⁾

「内國にて燧石と称するもの多く之を産すれども皆真正のものに非ず即ち左に記する産地の如きも實は皆玉火石なり但し茲には其内國內燧石の産地たるを知らしむるのみ」として下記の地名を挙げている。

常陸久慈郡諸沢村

武蔵比企郡青山村、腰越村、その外多摩郡、男衾郡数所

陸中岩手郡鶉飼村その外数所

阿波那賀郡大井村

伊勢員弁郡治田村

岩代耶麻郡宮川村その外数郡

4. 『博物館列品目録』天産部第三 鉦物類⁽⁷⁾

明治13年

ヒウチイシ 燧石 Flint

- | | |
|-----------------------------|------------------|
| (1) 山城葛野郡梅ヶ畑 | 澳 ⁽⁸⁾ |
| (2) 伊勢員弁郡治田山 ⁽⁹⁾ | 同 |
| (3) 三河渥美郡 | 同 |
| (4) 常陸久慈郡諸沢村 | 同 |
| (5) 美濃郡上郡福野村 | 同 |

- | | |
|--------------------|----------|
| (6) 加茂郡勝山内岩屋観音阪 | 同 |
| (7) 多芸郡白石村養老山 | 同 |
| (8) 岩代大沼郡山入村字山入 | 同 |
| (9) 越前阪井郡一ノ瀬村(イ) | 同 |
| (10) 同所(ロ) | 同 |
| (11) 越後蒲原郡神谷村字沼ノ沢 | 同 |
| (12) 因幡気多郡河内村 | 同 |
| (13) 阿波海部郡皆瀬村 | 同 |
| (14) 阿波麻植郡木屋平村 | 同 |
| (15) 豊後大野郡木浦鉦山 | 同 |
| (16) 同速見郡六太郎村山中 | 同 |
| (17) 小笠原島 明治11年11月 | 同島?小花作助? |

附

- | | |
|------------------------|---|
| (18) 北海道後志瀨棚郡領トシベツ川 | 澳 |
| (19) 同同同郡トシベツ川 | 同 |
| (20) 同同同郡字ホリカップ海岸 | 同 |
| (21) 同同古宇郡川白村ノ内字ルウクシナイ | 同 |
| (22) 同石狩札幌郡定山溪 | 同 |

※以下は燧石ではないが、参考に記しておく

タマノヤニ又はギョクズイ

仏頭石(義訳名) Chalcedony

- | | |
|-------------------------------------|-------------------|
| (1) 大和山辺郡友田村 方言豆舎利石 | 澳 |
| (2) 伊豆田方郡天城山官林 方言角石 | 同 |
| (3) 相模足柄下郡元箱根村方言火打石 | 同 |
| (4) 岩代会津郡十島村字鷲ノ倉山内購 ⁽¹⁰⁾ | |
| (5) 同大沼郡山入村字山入 | 内購 |
| (6) 陸奥津軽郡母衣月海浜 方言舎利石 | 澳 |
| (7) 同同今別浜 | 同 |
| (8) 同北郡脇野沢村 | 同 |
| (9) 能登珠洲郡小木村山 方言舎利石 | 同 |
| (10) 越後蒲原郡神谷村沼ノ沢 | 同 |
| (11) 佐渡加茂郡村々 | 同 |
| (12) 同同北小浦村 | 同 |
| (13) 同同日市縫村 | 同 |
| (14) 同相川郡 | 同 |
| (15) 阿波 | 工 ⁽¹¹⁾ |
| (16) 北海道胆振山越郡及び長万部郡 | 澳 |
| (17) 同同同郡 | 同 |

メノウ 瑪瑙 Agate

- | | |
|--------------------|----|
| (1) 常陸那珂郡八田村 方言瑪瑙 | 内購 |
| (2) 美濃武儀郡下ノ保山字ヒョウ山 | 澳 |
| (3) 信濃伊奈郡大河原村 | 同 |
| (4) 越中砺波郡大西村 | 同 |
| (5) 同布志名村及び面白村 | 同 |
| (8) 阿波那賀郡椿地村 | 同 |
| (9) 長門豊浦郡大坪筋浜 | 同 |

- (10) 筑前宗像郡渡村 同
 (11) 肥前松浦郡宝亀村 内購
 (12) 同 南郷椽ノ木 澳
 (13) 北海道石狩厚田郡エトロフ海浜 同

(※旧国名のみを表記と海外は省略した。)

5 『金石學附録 日本金石産地』⁽¹²⁾ 明治12年

燧石（俗間之を発火器に用う）

- 伊勢員弁郡 治田山
 同 桑名郡 多度村字袋谷
 武蔵比企郡 青山村字大原入腰越村
 同 男衾郡 三品村
 同 多摩郡 黒澤村
 常陸久慈郡 諸沢村、北富（田）⁽¹³⁾ 村字三ヶ草山、
 増鉄山（多）
 美濃武儀郡 桐洞村字池田
 同 郡上郡 白山村字下切
 同 加茂郡 勝山村観音阪
 磐城伊具郡 耕野村
 同 檜葉郡 上浅見川字火打石
 同 刈田郡 藏本村
 岩代耶摩郡 宮川村
 同 伊達郡 平沢村
 陸前黒川郡 宮床村
 陸中岩手郡 鶉飼村字鬼越山
 同 閉伊郡 浜岩泉村
 陸奥津軽郡 外童子村
 羽前置賜郡 萩村、下萩村両村、入会北沢 村沼平
 同 村山郡 高松村字湯沢村
 越後古志郡 蓬平村
 備前磐梨郡 田原上村、南方村
 同 和気郡 勢力村
 備中阿賀郡 赤馬村
 阿波那賀郡 大井村

※以下は燧石として分類されていないが、参考として記しておく

仏頭石 義訳（従来瑪瑙及び仏頭石を混称すれども今之を分かつ）

- 大和山辺郡 友田村 原称 豆舍利石
 伊豆田方郡 天城山官林 同 角石
 常陸那珂郡 八田村 同 瑪瑙
 信濃伊那郡 大河原村
 岩代会津郡 十島村字鷲ノ倉山 同白瑪瑙
 陸奥津軽郡 母衣月村字舍利浜 舍利石
 羽前飽海郡 北俣村 同 火打石
 羽後雄勝郡 中仙道村 同 瑪瑙

- 能登珠洲郡 小木村山 同 同
 佐渡加茂郡 月布施村 同 舍利石
 同 同 北小浦村 同 葡萄石
 瑪瑙
 岩代河沼郡 坂本村字上川原
 陸奥津軽郡 富田村字桔梗野
 羽前田川郡 鉢子村
 能登鳳至郡 光浦村光浜
 越中砺波郡 荒木村吉江新村領字阪尻、嫁兼村
 大西村字是ヶ谷西原村樋戸村、高宮村
 越後蒲原郡 笹目村
 出雲意宇郡 布志村、湯町村福岡村字畑尻
 阿波那賀郡 椿地村
 筑前宗像郡 渡村
 肥前松浦郡 宝亀村

3 まとめ

以上、明治前期の鉱物誌関係書物に掲載された火打石産出地を抜き出したが、内国勸業博覧会資料^(1 b)（以下、博覧会資料と略す）に記されていない産地や郡名、不明瞭な文字が判明した事例を挙げてまとめとしたい。

1. 新たに判明した産出地

①熊谷県比企郡青山村、武蔵男衾郡三品村
 かつて筆者が集計した「明治7年『府県物産表』にみる発火具産出・産額表」において、熊谷県における燧石産出量を掲載⁽¹⁴⁾したことがある。その後、群馬県内に大規模な産出地が見受けられないことから、埼玉県内秩父中古世層中のチャート採掘地を想定⁽¹⁵⁾した。採掘量は不明であるが、『各府県金石試験記

明治八年分』に「熊谷県 比企郡青山村字大原入産」と記されており、先の想定は間違いではなかったようである。加えて、『日本金石産地』には、比企郡に隣接した男衾郡三品村も記されている。博覧会資料に掲載されていた多摩郡内の産出地は、現地調査によってチャートであることが確認⁽¹⁶⁾されている。今回判明した比企郡、男衾郡の火打石については未調査であるが、秩父中古世層のチャート⁽¹⁷⁾であると考えて間違いなからう。秩父中古世層のチャート北端は群馬県西部の南牧川流域にまで達しているが、近接する下仁田町の古老に「かつて火打石をよく拾った」という場所を案内していただいた際に確認した石材はやや硬質な石英であった。したがって、

南牧川流域のチャートは地元で使用されることはあっても、火打石として流通することは無かったと推定している。

②三河渥美郡

本邦金石略誌に掲載されている。渥美郡内の何処かについては不明であるが、旧渥美郡は



**大岩山展望台から火打坂を望む
中央低部を東海道が通過**

現在の豊橋市東部も含まれ、田原市丘陵部から豊橋市東部一帯にはチャート⁽¹⁸⁾が帯状に存在している。このチャートが存在する丘陵地帯を横断するかたちで東海道が通っていた。東海道がこの丘陵地帯を通過する箇所は今も「火打坂」という地名が残っている。ここはその地名のとおり、江戸時代には火打石



大岩山のチャート

③美濃郡上郡福野村

博物館列品目録に掲載されている。博覧会資料には同じ郡上郡の「白山村字下切」が掲載されている。現地名との詳細な比定は行っていないが、郡上市美並町の大字名に「白山」があり、同じ美並町内に「福野」という鉄道駅があり、両者は近接した場所であった可能性がある。

④美濃加茂郡勝山内岩屋観音坂

博物館列品目録に掲載され、日本金石産地には「勝山村観音坂」と表記されている。現



観音坂から名古屋方面を望む

国道の右直下に木曾川が流れる

在も加茂郡坂祝町勝山に岩屋観音がある。ここは、チャートからなる山が木曾川に向かって突き出ている場所で、中山道がこの山を越える為坂となり、頂部付近に岩屋観音が存在する。先の豊橋市火打坂同様、火打石石材が存在する場所を街道が通過する例である。



岩屋観音



岩屋観音賛同のチャート露頭

⑤越後蒲原郡神谷村字沼ノ沢

博物館列品目録に掲載されている。地名から現在の東蒲原郡阿賀町神谷付近と考えられる。⑥阿波麻植郡木屋平村博物館列品目録に掲載されている。現在の美馬市木屋平に比定される。

⑦阿波海部郡皆瀬村

博物館列品目録に掲載されている。博覧会資料には同じ海部郡で小川村が記されている。現在の地名では海部郡海南町に小川皆ノ瀬があり、同町には隣接して小川小川（小川字小川）も存在する。徳島県の火打石産地としては太田井町のチャートが有名である

が、博覧会資料には近接地の那賀郡加茂谷村大字大井村（現：阿南市加茂町）が認められる。徳島県においては秩父帯南帯と四万十帯北帯のチャート⁽²⁰⁾を利用しているようである。

⑧豊後速見郡六太郎村山中

博物館列品目録に掲載されている。博覧会資料には同郡下村が認められ、共に現在の速見郡山香町と考えられる。

⑨北海道後志瀬棚郡領トシベツ川、同郡字ホリカップ海岸、古宇郡川白村ノ内字ルウクシナイ、石狩札幌郡定山溪

いずれも博物館列品目録に掲載されている場所である。博覧会資料では、北海道の火打石産出地が一箇所掲載されているのみであるが、この資料により4箇所増加した点が重要である。

⑩相模足柄下郡元箱根村

博物館列品目録には「燧石」としてではなく、「タマノヤニ又はギョクズイ」として掲載されている。しかし、義訳名がカルセドニーであることと、「方言 火打石」との注記がなされており、地元で火打石として認識又は使用されていたと考えられる。

2. 詳細が判明した産出地

①岩代耶麻郡宮川村その外数郡

博覧会資料では、産地「宮川字二ノ倉山」出品者「加納村 佐藤平勇」とあったが、本邦金石略誌により、現在の福島県耶麻郡熱塩加

納村大字宮川あたりと推定できる。

②岩代大沼郡山入村字山入

博覧会資料には郡名が記されていなかったが、博物館列品目録によって「大沼郡」であることが判明した。現在の大沼郡金山町横田と松坂峠間の「山入」付近と推定される。

③岩代伊達郡平沢村

明治23年の第三回内国勸業博覧会資料には伊達郡睦合村が記されている。この睦合村は明治22年に平沢村を含めた4村が合併して誕生した村であり、同一場所を示している可能性が高い。平沢村の火打石に関しては、『福島縣勸業年報第三回』⁽²¹⁾に一本松、笹平、雨沼、悪平の四箇所の字名と合計の坪数5,975坪と記している。かなり近接し、大規模に採掘していたと考えられる。

④山城葛野郡梅ヶ畑

博覧会資料では「葛」の文字が判読不可能であったが、博物館列品目録により「葛野郡」であることが確実となった。

註

1 a 畑 麗「火打ち道具の文献 近世」『火打ち道具の絵画資料』『火打ち道具の製作調査と映像記録』東京都江戸東京博物館 調査報告書 第14集 東京都江戸東京博物館 2002

1 b 松崎亜砂子「明治時代の発火具生産」『火打ち道具の製作 調査と映像記録』東京都江戸東京博物館 調査報告書 第14集 東京都江戸東京博物館 2002 第一回から第五回の内国勸業博覧会関連資料に掲載された火打石産出地一覧表を作成している。

2 田賀井篤平 編『東京大学コレクションX I 和田鉱物標本』東京大学総合研究博物館 2001
物標本』東京大学総合研究博物館 2001

3 和田維四郎『明治八年分 各府縣金石試験記』文部省 1876（明治9年）

以下表記は原本（国会図書館蔵本を使用）に従うが、旧漢字やカタカナ表記は修正した。

4 博物館列品目録の表記などから考えて礪波郡であろう。

5 和田維四郎『明治九年 各府縣金石試験記』文部省 1876（明治9年）

6 和田維四郎編『本邦金石略誌』日就社 1878（明治11年）

7 『博物館列品目録』天産部第三 礦物類 内務省博物局 1880（明治13年）

この書において「珪酸鋁属」内の「石英」の項目において、「燧石および玉火石は同じものでFlintとするがその中にChalcedonyが混入するので、玉火石をChalcedony、燧石をFlintとする」と記している。

8 オーストリア博覧会事務局が募集し、あるいはオース

- トリアから持ち帰った物品を明治8年本局に収蔵
- 9 本邦金石略誌では「治田村」、博物館列品目録では「治田山」と表記が異なる。
- 10 明治10年内国勸業博覧会閉会後各府県より寄贈
- 11 明治10年工部大学より寄贈
- 12 武藤 壽 篇、田中芳男、和田維四郎 撰『金石學附録 日本金石産地』宮内省博物館 1879 (明治12年)
- 13 原本には「田」がないが、他書を参考にして補った。また、原本 (国会図書館蔵本) には後の書き込みによって「田」が補われている。
- 14 大西雅広 『上州吉井の火打金と火打石』江戸遺跡研究会第76回例会発表資料 2000年7月1日
- 15 大西雅広 「上州名産の吉井火打金」『群馬の遺跡7—中世—近代—』上毛新聞社 2005
- 16 本書掲載小林 克 氏報告を参照。
- 17 埼玉県地学教育研究会編『新版 埼玉県 地学のガイド』コロナ社 1992
- なお、『石器石材Ⅲ—在地系石材としてのチャート—予稿集』笠懸野 岩宿文化資料館、岩宿フォーラム実行委員会 2005には、小川町と越生町のチャート露頭写真が紹介されている。
- 18a 堀 常東 「5万分の1地質図幅『豊橋』地域の秩父帯チャートから産するペルム紀放散虫化石」
- 18b 堀 常東 「5万分の1地質図幅『豊橋』地域の秩父帯チャートから産する三疊紀放散虫化石」
- 18c 堀 常東 「5万分の1地質図幅『豊橋』地域の秩父帯チャート及び碎屑岩から産するジュラ紀放散虫化石」いずれも『地質調査研究報告』第55巻9/10号 地質調査総合センター 2004
- 19a 佐野知堯『三河国二葉松』1740・1741 (元文5・6年) には、「土産名物器財部」「渥美郡」の項に「燧石 火打坂」と記されている。
- 19b 林 正森『三河刪補松』1775 (安永4年) 土産の品として「燧石、火打坂」が紹介されている
- いずれも久曾神昇、近藤恒次 編『近世三河地方文献集』国書刊行会 1980による。
- 19c 猿猴庵『東街道便覧図略』1786 (天明6年) 熱田から今切渡 (浜松市) 間は『東街道便覧図略巻一』名古屋市博物館資料叢書 三猿猴庵の本 名古屋市博物館 2001) としてカラーで掲載、翻刻されている。
- 20 日本の地質『四国地方』編集委員会編『日本の地質8 四国地方』共立出版株式会社 1991
- 21 『福島縣勸業年報第三回』福島県 1882 (明治15年) 内容は明治13年の統計である。(1) a 畑 麗 「火打ち道具の文献 近世」「火打ち道具の絵画資料」『火打ち道具の製作調査と映像記録』東京都

ニュースレター シレックス Vol. 1

発行 火打石研究会

発行日 2006年6月10日

編集 小林 克

連絡 <http://www.ne.jp/asahi/hiuti/isi/index.html>

注意 本紙を引用する場合は、必ず出典、筆者を明記してください

【編集後記】

数年来の懸案だった、火打石研究会のニュースレターをようやく出すことができた。しかし原稿を2月に募集しながら5月の考古学協会に間に合わせられなかったのは、全く不徳の至りである。本誌がより多くの人々の目にとまり、またホームページを見ていただけたらと願っている。(か)

